

◎「人と人をつなぐ日本語」再発見＝「日本語大賞」第1回表彰式

日本語の美しさや言葉のもたらす力を見つめ直す「日本語大賞」の第1回表彰式が1月31日、最優秀賞の受賞者が出席して東京・北区の東京書籍東書ホールで行われました。今後、さまざまな方面で日本語の大切さや学ぶことの楽しさを伝えるメッセンジャーとして活躍することになります。



日本語大賞は、東京書籍が創立100周年事業として創設し、日本語検定委員会が協賛、時事通信社が後援しています。第1回の今回は「人と人をつなぐ日本語」がテーマで、国内のほか海外からも計1833作品の応募があり、審査の結果4つの部門で4点が最優秀賞、25点が優秀賞と決まりました。

この日の授賞式には最優秀賞受賞者のうち、高校生部門の岡部憲和（18）さん、中学生部門の宮原皐熙さん（13）、小学生部門の佐藤優里佳さん（11）の3人が出席し、大学生・専門学校生・一般部門の加藤宣彦さんは都合により欠席しました。4人には賞状や副賞が贈られました。

フリーアナウンサーで日本語検定委員会審議委員の梶原しげるさんの司会で進行し、川端慈範東京書籍社長が「受賞作品はテーマを見事に表現していた」と主催者あいさつ。

梶田叡一審査委員長（兵庫教育大学学長）が「日本語が乱れていると言われるが、最終審査の45点を読んでみてそれほど心配しなくてもよいのではという感じを持った。新しい学習指導要領も各教科を通じて『言葉の力』を育てることを掲げており、社会で生きていく上でもきちっとした日本語の力が大切。これからも言葉に磨きをかけてほしい」と講評しました。

このあと、加藤さんの八丈島での7年間の中学校教師を通して子どもたちとの交流を取り上げた「島ことばに残る美しい日本語」、岡部さんの小千谷縮（おぢやぢみ）の名工の「ある職人のごとば」、宮原さんの台湾人祖父母との「かたことの日本語が伝えるもの」、佐藤さんの元気だった母が突然他界する時の最後のことば「心に残る母の『う・・・ん』」の最優秀作品が朗読されました。

